

【主題】 自分の問いをもって、学びをつなげていく児童の育成を目指して

【副題】 自分の考えを自分の言葉で表現しようと学び合う場の工夫を通して

【学校・団体名】 石巻市立大谷地小学校

【役職名・氏名】 教諭 藤坂 雄一

I はじめに

「令和の日本型教育」では、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解したり、未来を切り開くために必要な資質・能力を身に付けたり、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることが求められている。知識を活用して、他者と関わり合いながら課題を解決できる力の育成は、自分で考え、対話しながら新しい価値を生み出す「VUCAの時代を生き抜く力」の育成に向けた取組になると考える。そして、思考や対話に必要な「言葉の力」は、今後さらに必要な資質・能力になると考える。

II 問題の所在

勤務校は全校児童109名の小規模校である。石巻市河北地区の田園地帯に学校がある。単学級であるため固定的な人間関係は、学習での関係にも大きく影響する。素直に学習に取り組む児童が多い一方で、授業者の求める模範解答を探そうとする姿を感じ、主体的に学ぶ姿とは異なる印象が強かった。

教務主任兼研究主任だった筆者は、調査対象学級の学級担任（当時4学年）から相談を受け、主に国語科（「読むこと領域」）を中心とした指導法改善に取り組んだ。試行錯誤をしながら、継続的に指導協力を続けて今年で3年目に至る。

実態把握のためのアンケートでは、「国語科の学習内容は分かる方だ」と質問紙に回答する児童は算数科に比べて多いのに対して、国語科が活用力はそれほど高いとは感じられない状況であった。しかしながら、単元学習前に市販のワークテストを実施すると、ほとんどの児童が8～9割の正答率であった。「情報の取出し」はできるものの、その情報から自分の考えを形成し、問いに対して、適切に自分の言葉で表現する力が育っていないのではないかと考えるようになった。

当時、自分の考えを伝えることに対して、ほとんどの児童が苦手意識を持っていた。そして自信がないことをその理由として回答していた。「読めないから書け

ない」という状況は、「書けないから読もうとしない」という態度を醸成したのではないかと。授業において、問いとじっくり向き合い、考えを書く経験が不足していたのではないかと考えるようになった。

加えて、叙述に即して（または根拠を明確にして）、自分の考えを文章化する力を育てていく必要を感じた。良質なアウトプットのためには、良質なインプットが必要であるが、当時の彼らの読書習慣は十分とは言えなかった。多様なジャンルのテキストに触れる場が不足しており、一読したテキストの大体を理解しようとする主体性も十分に育っていなかった。

以下は、学級担任と共有した「目指したい児童の学びの姿（資質・能力）」である。

- ◎静かに座っていれば進んでいくのではなく、児童が自ら働き掛けないと学びが進まない授業デザイン。
- ◎児童自身が考えたい問いをもって学びに向かう姿。
- ◎形式的に交流させられるのではなく、課題解決の方法としての対話ができる豊かなコミュニケーション。

III 実践内容

1 アウトプットを意識した単元構想と問いの精選

「読むこと領域」において、単元における習得と活用のバランスを意識した単元構想を設定し、単元の導入時に児童と共有している。単元構想の基本型とその工夫点については以下の通りである。

【第一次】 学習の見通しを立てる。（グループ編成も）

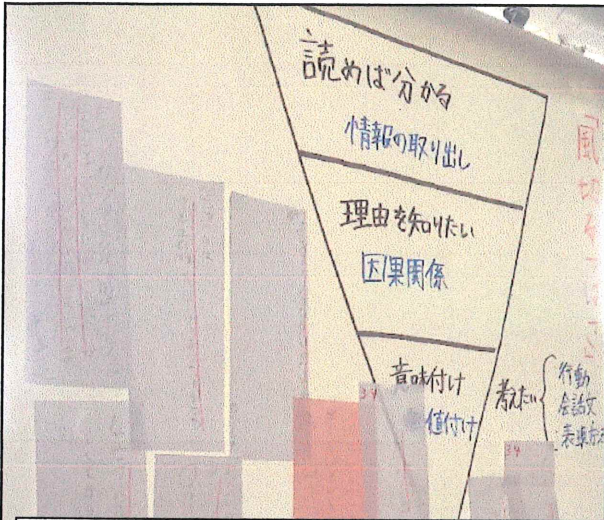
- ・学び方のイメージと単元のゴールの姿を共有する。
- ・教材文を読む（教材文と出会う）。
- ・「みんなで考えたい問い」を立て、分類をする。

【第二次】 個人思考と集団思考の往還

- ・自分の問いまたは友達の間いの中から、自分が気になる問いを選択し、同じ問いを選択した友達と考えを交流する。
- ・全体交流をしたい問いとして選択した問いについては、全体で考えを交流する。
- ・第三次の言語活動で活用できるスキルを確認する。

[第三次]

- 単元のねらいに応じた言語活動を設定する。
- 単元の学びを振り返る場を設定する。



★「問いの逆三角形」

初読において、問いを個人で短冊に記入し、逆三角形に示したカテゴリーに児童が類別したもの。模造紙には、児童の問いが貼られている。カテゴリーについては以下の通り。

- 上段：読めば分かる（情報の取出し）
- 中段：理由を知りたい（因果関係）
- 下段：意味付けや価値付け（読者と作品の関係）

教材文の初読後に「みんなで考えたい問い」を立てて分類し、全体で読み深めていきたい問いについて、比較・分類する。それぞれの段に短冊を貼り、全体で共有するようにした。

下段に行くほど、全体交流に適した問いという児童の認識である。学習経験を経ることで「それは読めば

分かるよ。」「私と同じ問いだね。」といった児童の交流が生まれていった。この問いを立てる経験は、教材文に対して「どのように向き合うのか」を学ぶことにもつながる。児童が自由に考えを交流する問いと全体で考える問いに分類し、単元の全体計画を児童と一緒に構成した。ただし、問いは、学び続けるなかで常に生じるものである。初発で生まれた問いのみならず、学びの中で生まれた問いについては振り返る際に記述するようにし、次時以降に取り上げるようにした。

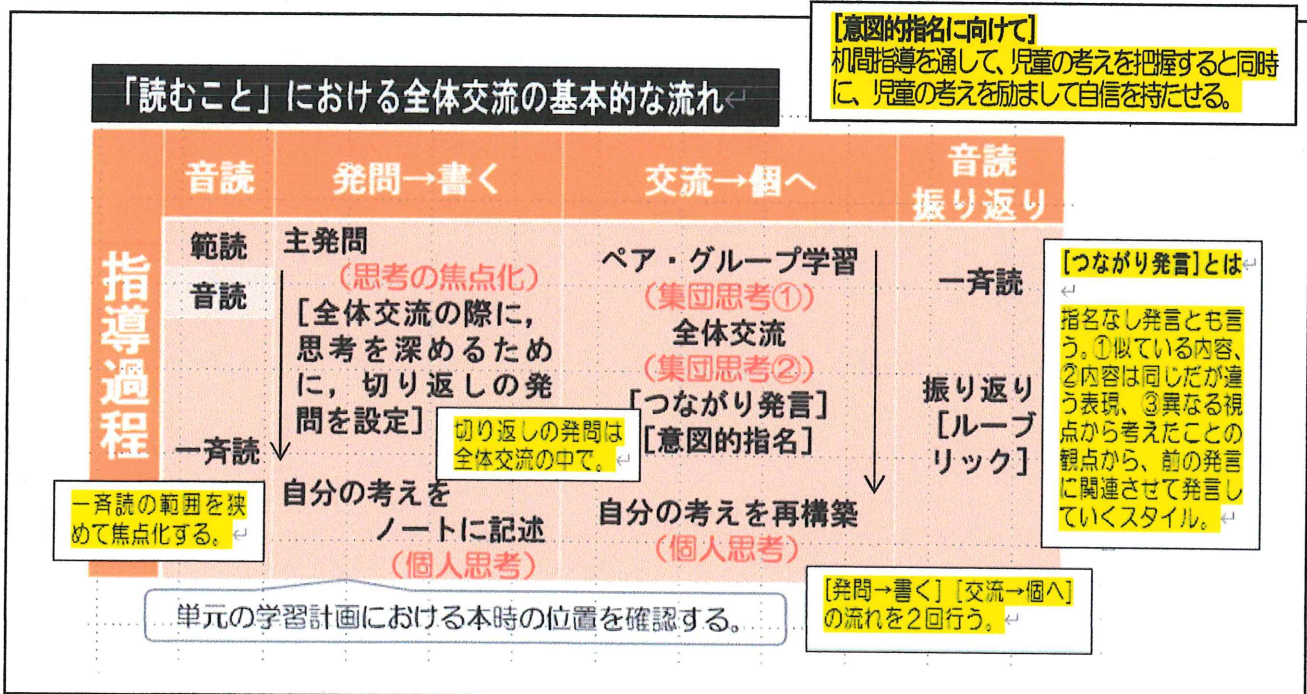
2) 「つながる」を意識し対話を生み出す場の工夫

★単元ごとに自分たちでグループ編成をする。

児童が学びの主体者であること」を自覚し、どんなグループ編成が全体の学びを円滑に進めることができるのかを考えさせ、自己選択・自己決定の場を単元の始めに行っている。どんなグループ編成が効果的に学びを進めることができるのかを経験を通して児童は学んでいる。誰とでも交流できる力を「学びの自由度」と呼び、誰とでも交流できること、さらに交流の質を高めることを、ゴールの姿の一つとして共有している。経験を重ねることによって、5分程度でグループ編成の合意形成ができるようになった。「あまり〇〇さんと一緒に考えたことがないから、私はこっちのグループに行くね。」という会話からも、学びやすさと同時に、新しい交流を求めようとする姿を見取ることができる。

★学習の土台となる学びのスタイル

特に、単元の中核となる問いについては、「全体交流



で考える問い」として、児童と一緒に単元の船体計画を話し合いながら設定する。「全体交流の基本的な流れ」を作成し、全体交流においても自分の考えを書くことを大切に。「個（問いに対する考えの形成）→グループ交流→全体交流→個（考えの再構築）」という思考の流れを授業者がファシリテートしていくようにした。なお、この基本の流れは筆者が宮城教育大学教職大学院で相澤秀夫名誉教授から学んだことを基に、「目指したい児童の学びの姿」に応じて工夫を加えたものである。

★「つながり発言」で児童同士の交流を生み出す

工夫したことの 하나가、「つながり発言」と呼んでいる交流スタイルである。

「つながり発言」の観点

- キーワードや似ている内容でつながる。
- 内容は同じだが、違う表現方法でつながる。
- 異なる視点で考えたことでつながる。

授業者による意図的指名で全体交流をコーディネートしながらも、児童が交流を自分たちのものにするために「つながり発言」を取り入れた。これを繰り返すことで、授業者の発言数はぐっと減っていく。「ちょっといいですか。〇〇というキーワードでつながるんですけど……。」「みんなとは違う考え方でつながります。」といった言葉で対話をつくろうとする姿が見られるようになった。「これは、グループで話し合っている時に生まれた考えなんですけど……。」といった思考の広がりを感じた場面もあった。

また、自分の考えを書くことに加え、対話をメモすることも重視してきた。ノートは一例であるが、青ペンと赤ペンを活用しながらノートをつくるようにした。ノートの作り方は児童によって異なるが、自分の考えは鉛筆で、青ペンと赤ペンについては以下のような基本ルールを共有した。それによって、児童の思考がノートに可視化されることになり、振り返ったときに「学びの記録」としても有効だったからである。

○青ペンで書き加えること

自分になかったこと（教えてもらったこと）
この言葉がすごい！（言葉をもらう）
新たに気付いたこと

○赤ペンで書き加えること

考えの再構築・吟味・新しく生まれた問い

★「交流のループリック」を活用して交流を振り返る

グループでの交流や全体交流を振り返る観点として、具体の姿をループリックで共有している。交流をすればよいのではなく、より質の高い交流とは何かを考えることにつながっている。その前提として、十分な交流量を確保することが必要である。話型などを示すのではなく、グループでやりやすい方法を試しながら、進めていくようにした。児童に示しているループリックの内容は以下の通りである。

[段階1]

- ・自分の考えを話す。聞こえる声量で話す。
- ・相手の話を聞く。分からないときは質問する。

[段階2]

- ・自分の考えを分かりやすく伝える。
- ・相手の考えを聞いてメモする。

[段階3]

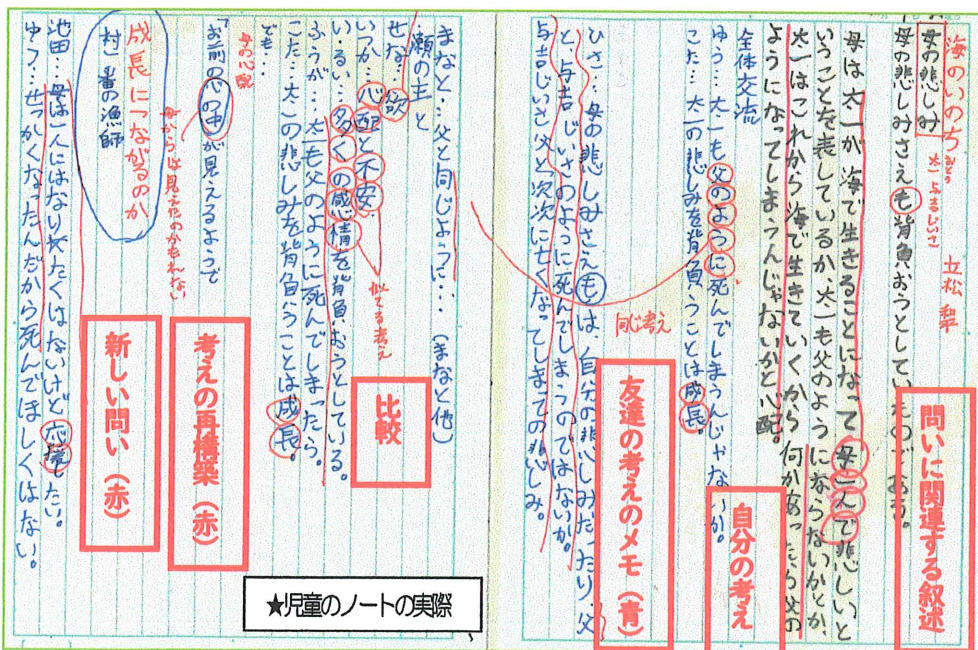
- ・同じ/違う（比較）
- ・どうしてそう思った？（根拠/理由）

[段階4]

- ・これでいいのかな？よりよ考えは？他には？（意見の吟味/再構築）

[段階5]

- ・では……はどうなる？……はどういうこと？（関連した問い/追究）



3) 多様な文章や表現に触れる機会の設定

★NIEタイム・読書タイム

朝の10分間を全校でNIEや読書活動に取り組む時間として設定している。NIE実践指定校であったこの3年間は、複数の新聞(こども新聞を含む)が置かれているホールで自由にスクラップ活動に取り組んでいる。また、同じ記事情報をタブレット端末で共有し、要約したり感想を交流したりする活動も取り入れている。

「記事を速く読めるようになった。読む力が付いているような気がする。」「書いてある内容を読み取り、要約のこつが分かった。」「他の新聞記事も読みたくなった。」という児童の声が寄せられている。



引用:河北新報(2023年7月11日)

多目的コーナーで思い思いのスタイルで新聞を読み込む児童たち

また、学校図書館と連携しながら関連読書に取り組んでいる。同じ作者や同じテーマで読み比べたり、第二次で学んだことを生かしたリーフレットや新聞づくり、推薦文などを作成したりしている。完成した作品は、全校児童が通る場所に掲示することにより、相手意識や目的意識を確認しながら取り組むようにした。

IV 実践に対する考察

★児童が作った問いに対して、Jamboardに考えを記述させ、全体交流を試みた3年前。児童は付箋を読み上げるだけで、いつものような対話的交流が生まれなかった。同じ学習場面を、いつもと同じように全体交流

管理人:先生 名前書いて 考える問い ↓ 名無し

この作業大 事にして自 らと比べて 遊んだ。面白い	じゃあおぼ みこ 好得	どうもよく おぼしめさ ないけれど おぼしめさ ないけれど おぼしめさ ないけれど	思い浮か べたこと を、おぼ しめさ ないけれど	おまじさんは妙 子にどんな気持 ちでコスモス花 をあげたのか	いい子に育 つんだよ 好得	いい子に育 つんだよ 好得
楽しくなっ てよ 好得	やさしい子 になつて取 組むの いい 好得	おまじさんの おぼしめさ ないけれど おぼしめさ ないけれど	またおぼし めさない けれど 好得	おまじさんは妙 子にどんな気持 ちでコスモス花 をあげたのか	いい子に育 つんだよ 好得	いい子に育 つんだよ 好得
おまじさん は、おぼ しめさ ないけれど おぼしめさ ないけれど	おまじさん は、おぼ しめさ ないけれど おぼしめさ ないけれど	おまじさん は、おぼ しめさ ないけれど おぼしめさ ないけれど	おまじさん は、おぼ しめさ ないけれど おぼしめさ ないけれど	おまじさん は、おぼ しめさ ないけれど おぼしめさ ないけれど	おまじさん は、おぼ しめさ ないけれど おぼしめさ ないけれど	おまじさん は、おぼ しめさ ないけれど おぼしめさ ないけれど
またおぼし めさない けれど 好得	またおぼし めさない けれど 好得	またおぼし めさない けれど 好得	またおぼし めさない けれど 好得	またおぼし めさない けれど 好得	またおぼし めさない けれど 好得	またおぼし めさない けれど 好得
コスモス の花を おぼしめ さない けれど	コスモス の花を おぼしめ さない けれど	コスモス の花を おぼしめ さない けれど	コスモス の花を おぼしめ さない けれど	コスモス の花を おぼしめ さない けれど	コスモス の花を おぼしめ さない けれど	コスモス の花を おぼしめ さない けれど

の場を設定すると、交流の量や質についての大きな違いを感じた。児童も学びやすさを感じていたようだ。全体交流の基本的な流れの方が慣れていたと考えるが、ノートに記述しメモをすることで、思考を整理し交流を支えることにつながったとも考えられる。

★交流の量を確保すること、さらに交流経験を重ねることで交流の質が変わってきた。その契機となったのが、全体交流における「でもさ……」という児童の発言であった。この発言を大いに称賛した。「でもさ……」が言える関係性は貴重であることも伝えている。ルーブリックの視点も含め、どんな交流を目指すのかを共有することで、交流の当事者意識が高まり、「させられている交流」から脱却することにつながった。

★意味付けたり価値付けたりする問いに対して、ほとんどの児童が、叙述を参考にしながら自分なりの考えを記述することができるようになった。多様な考えを受け入れようとする態度が醸成されつつあるが、よりよい考えに再構築するための交流ができるようになるためには、また別の方策が必要なのかもしれない。

V おわりに

4月に実施した全国学力学習状況調査(国語科)では、全国平均を10ポイント以上も上回る結果となった。3年目となる実践の方向性の確かさを検証・分析していきたい。そして、何より嬉しかったのは、学習に対して苦手意識を強く持っていたA男さんが、始業式で以下のような作文を発表したことであった。

…(略)…まず学習面の目標について発表します。

…(略)…二つ目は国語です。ぼくは物語文を読んで、人物の心情の変化を考えることが得意です。三学期は様々な作品と触れ合い、自分の考えを自分の言葉で表現できる力を身に付けたいです。……(略)……

グループや全体での交流を通して自分の考えを受け止めてもらえることが、児童にとって「学びの手応え」として積み重なっていったのだろうと考えている。3年前までは自分の考えを一文書くことも難しかったA男さんは、今では「でもさ……」と全体交流の場で、よく発言するようになった。

[参考文献]

- ・小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説国語編(文部科学省/平成30年2月/東洋館出版)